グルーピングケア研究会

ケアの基礎知識

グルーピングケアのシステム

代表遠　藤　邦　弘

1995

【グルーピングケアの基本システム】

　スタッフは1人ひとりの利用者に対して、「本人の望むものは何か？」「日常生活のどの部分が不適応な状態なのか」を評価・分析し、その結果に基づいて、1グループ5～6人を編成しさまざまな活動を行います。このシステムでは、施設にあるすべての設備・備品が1人ひとりの利用者にとって過去の体験を疑似再生できる空間（ステージ）を作り出すための「アタッチメント」です。たとえば、振り子時計や黒電話やわらじ（ミニチァ）、炉端にかける土瓶などがそうです。

そのステージでは、パートナーとしてのヘルパーや看護師（彼女たちも時には孫となり、時には妻となるなどアタッチメントの役割を果たしています）とともに、利用者自身が自分の意思に基づいて、「ゆったり・いっしょに・たのしく」日常生活を自由に行動できるような環境づくりが必要です。おおぜいで行うクラブ活動と違い、比較的少人数でじっくり取り組めるグルーピングケアによって、認知症に多い見当識（意識・注意力・知覚思考・判断・記憶・自我意識など）の障害を緩和・軽減させることができます。グルーピングケアは、大規模施設でも少人数によるグループホームの技法が効果的に作用することを実証できました。確かに当初は、「手を出さない、口を出さない、目を離さない」という方法論を頭ではわかっていても実施できなかったという苦労がありました。そんなスタッフにも、余裕と自信が生まれ、利用者自身もリラックスした気持ちで自由な生活を送れることから、日常的に落ちつきが生まれ、いわゆる問題行動の軽減に大きくつながっているのは確かなことです。

グルーピングケアの基本システム

MRO―K
（生活様式の再編成）

↓

バックグランドアセスメント
（判定）

↓

必要なケアの検討

↓

グルーピングケアの目的
（生活様式の再編成）

1　残存機能を引き出し、生活の自立を促す
2　感覚統合、フィードバック、記憶の蘇りを促す
3　自信・自尊心を高める
4　生活障害による生活の再編成
5　利用者自身のペースで、生活の流れを作り出す。
　①いっしょに行う。
　②心地よい関係でケアする。
　③アタッチメントを介在させる。
　④生活の再編成はゆっくりと行う。

散歩・茶話会・ホットケーキつくり・りんごの皮むき・輪投げ・あやとり・塗り絵・折り紙・干し柿つくり・ディナー外出 etc